

【論文】

## 東ドイツによる咸興とヴィンの戦災復興

### EAST GERMANY'S POST-WAR RECONSTRUCTION OF HAMHUNG AND VINH

富田 英夫\*<sup>1</sup>  
Hideo TOMITA

**Abstract:** This study focuses on the continuity between East Germany's reconstruction assistance in Hamhung (North Korea) and Vinh (Vietnam) from the viewpoint of urban design. In particular, it explores the similarities and differences in urban design between the two cities. First, the 1930s Soviet Union urban design of German-speaking architects was traced to the background of East Germany's urban planning for the reconstruction of Vinh. Then, the similarities and differences between the urban designs of Hamhung and Vinh were clarified. Consequently, it can be assumed that (1) Hamhung and Vinh inherited the methodologies themselves and (2) as East Germany's construction assistance matured, so did the relationship with the local community.

**Keywords:** *East Germany, North Korea, Vietnam, Socialist city*

東ドイツ, 北朝鮮, ベトナム, 社会主義都市

#### 1. 序

##### 1-1. 研究の背景

東ドイツとベトナムの間の国家間の関係は、第一次インドシナ戦争の終結後、1956年に締結された二国間協定(貿易、国家安全保障、科学協力)にまでさかのぼる。その後、1973年にパリ和平協定が締結されたのを期に、ファム・ヴァン・ドン首相(Pham Van Dong: 1955-87 首相)が北ベトナムのおおよそ中間に位置するゲアン省の省都ヴィン(Vinh)の都市復興の設計(Projektierung)を東ドイツに要請した。同首相は、他の社会主義諸国にも同様に、他の都市の復興を要請しており、ベトナム戦争時に軍事境界線が存在した都市ヴィンリン(Vinh Linh)より北の主要都市の復興は、ソ連をはじめとする社会主義諸国に割り当てられたのだった。

そもそもヴィンはベトナムの社会主義化を主導したホー・チ・ミン生誕の地であったことから、同じ社会主義国家である東ドイツにとっても特別な意味を持つ都市であった。さらにヴィンは、ハノイ、ハイフォンに次ぐ第3の「産業社会主義都市」にする事が1961年に決議されており、1974年時点での人口は85,000人を数えた。

1973年10月22日に都市復興にかんする最終的な二国間協定の調印を行い、ここに「設計と建設」(Projektierung und Aufbau)からなる正式な都市復興の援助が始まった。

当初は1978年までの5年間の計画だったが、その後、ベトナム政府の要請で2年間延長され、1980年までの計7年の援助となった。

##### 1-2. 既往研究

東ドイツによるヴィンにおける都市復興の援助(復興都市計画)については、クリスティーナ・シュベンケル著『Building Socialism』(2020)の第2部「Reconstruction」(103-207頁)が詳しい。本論3章の咸興とヴィンの比較においては、シュベンケルの記述からヴィンの計画内容を把握し、著者が継続的に研究した咸興と比較した。

国際政治の観点からは、川喜田(2019)が東ドイツによる北朝鮮の復興支援とベトナムの復興支援には連続性が伺える事を指摘している。

##### 1-3. 研究の目的と方法

そこで本研究は、都市設計の観点から東ドイツによる咸興(北朝鮮)の復興支援とヴィン(ベトナム)の復興支援の連続性を指摘しようとする。その端緒として本稿では、咸興とヴィンの都市設計の共通点と相違点を明らかにする。まず2章で東ドイツによるヴィンの復興都市計画の背景を1930年代ソ連におけるドイツ語圏建築家の都市設計にさかのぼって把握し、ヴィンの都市復興の位置づけを行う。つぎに3章で咸興とヴィンの都市設計の共通点と相違点を明らかにする。

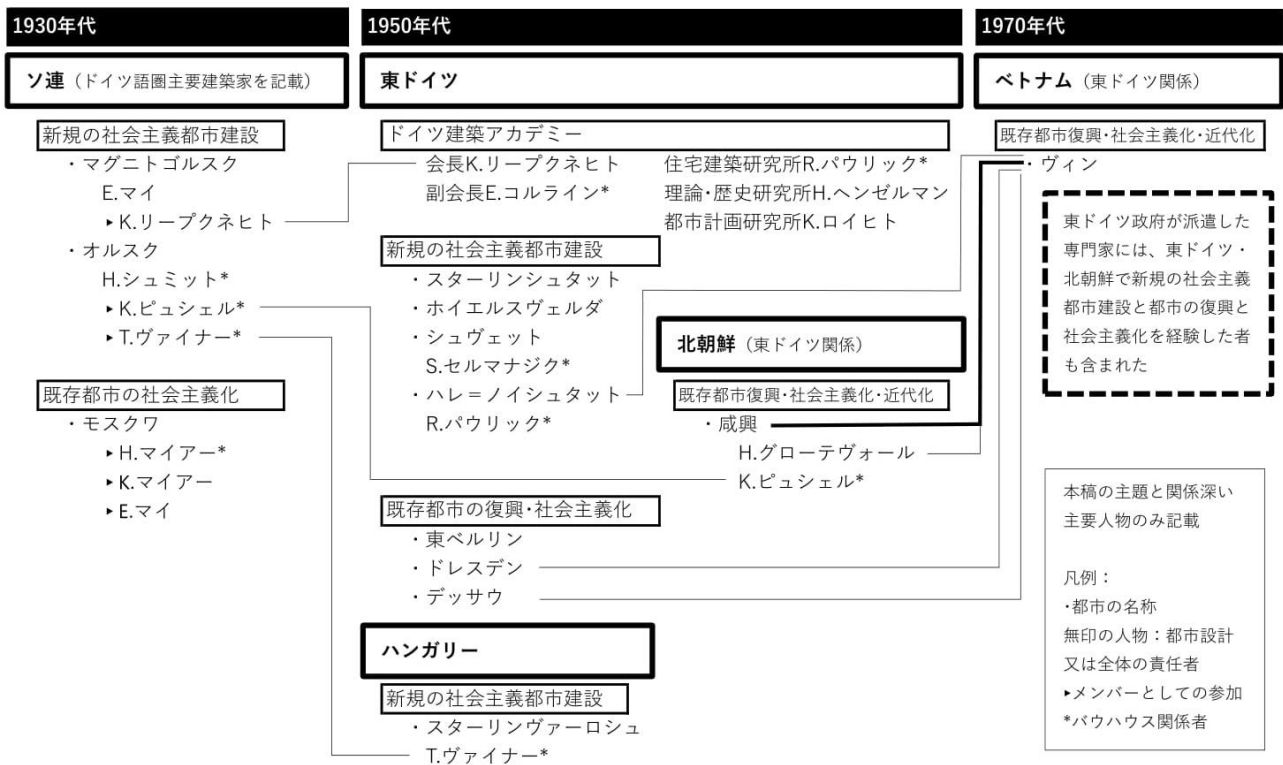


図1. 東ドイツによる復興都市計画における専門家（建築家・都市計画家）の関係

## 2. 東ドイツによるヴィンの復興都市計画の背景

### 2-1. 1930年代ソ連の社会主義都市建設におけるドイツ語圏の建築家の関与

社会主義国家における都市空間の大きな特徴は、デモ行進用の街路、都市の中央に位置する広場とそれに隣接するモニュメンタルな建築、および住宅団地と言える。こういった社会主義都市を特徴づける要素は、最初の社会主義国家ソ連における1930年代の都市計画でまず現れた(Tomita, 2016)。そこには、外国人建築家として都市計画を行ったエルンスト・マイ(Ernst May)やハンス・シュミット(Hans Schmidt)、ハンネス・マイアー(Hannes Meyer)などドイツ語圏の建築家の影響も確認できる(Tomita, 2014)。

1930年代ソ連における社会主義都市は、(1)社会主義都市を新規に建設する場合と(2)既存都市を社会主義都市として再建する場合(首都モスクワなど)に大別される。とくに前者の代表例であるマグニトゴルスクやオルスクのような新規の工業都市を社会主義都市として設計する場合にドイツ語圏の建築家が都市設計の責任者となり建設された。それらの設計チームには、のちに1950年代東ドイツにおいてドイツ建築アカデミーの初代会長となるクルト・リープクネヒト(Kurt Liebknecht マグニトゴルスクにおけるマイのチーム)や、東ドイツの建設援助の一環で北朝鮮にて都市設計を行うコンラート・ピュシェル(Konrad Püschel オルスクにおけるシュミットのチーム)

がいた事は注目すべき点である(なおシュミットのチームには1950年代ハンガリーで社会主義都市を設計したティボール・ヴァイナーTibor Weinerも活動していた)。

### 2-2. 1950年代東ドイツにおける社会主義都市の概観

1950年代東ドイツでは、第二次世界大戦における戦災からの復興と都市空間の社会主義化が急務であった。建築・都市分野においてそれらを主導したのが1951年に設立されたドイツ建築アカデミー(Deutsche Bauakademie)であった。前述したようにその初代会長にはソ連で都市建設の経験を持つリープクネヒトが就任した。副会長にはバウハウス卒業生エドムント・コルライン(Edmund Collein)、住宅建築研究所長にはバウハウス卒業生ではないがグローピウスやバウハウスと関係の深いリヒャルト・パウリック(Richard Paulick)が就いた。ただし建築アカデミーのポストがバウハウス関係者で占められていたわけではなく、理論・歴史研究所にはヘルマン・ヘンゼルマン(Hermann Henselmann)、都市計画研究所にはクルト・ロイヒト(Kurt Leucht)というように、基本的な能力のある建築家が重要なポストに就き、かつ社会主義都市の設計においても主導的な立場にあった。

1950年代東ドイツにおける社会主義都市は、(1)社会主義都市を新規に建設する場合と(2)既存都市の戦災復興と社会主義都市化を同時に行う場合とに大きく分けられる。1930年代ソ連と異なり、1950年代東ドイツにおい

ては既存都市の戦災復興と社会主義化を同時に行う必要があった。この場合、既存の都市構造を活かした社会主義都市が求められるため、新規の社会主義都市の建設とは異なる方法論が必要となる。

都市の復興と社会主義化を同時に行った経験は1955年から東ドイツ主導で行われた北朝鮮第二の都市咸興(咸興と隣接する興南も後に咸興に編入されたため、本稿で咸興と記す場合は興南地区も含むものとする)の戦災復興と社会主義化において直接的に活かされた。

### 2-3. 1970年代ベトナムの社会主義都市建設における東ドイツの関与

前節で述べた1950年代東ドイツの国内と北朝鮮における都市復興と社会主義化の経験が活かされたのは、1970年代ベトナムにおける都市復興支援においてである。既に述べたように、1973年、東ドイツはベトナム首相ファム・ヴァン・ドン(Pham Van Don)の要請に基づいてベトナム北部の都市ヴィンの復興都市計画を開始した。東ドイツ政府がヴィンの復興を担当する建築家・都市計画家として採用した者の中には、東ドイツや北朝鮮で社会主義都市を建設した経験を持つ建築家・都市計画家も含まれていた(Schwenkel, 2020)。具体的には、デッサウ(Dessau)、ハレ=ノイシュタット(Halle-Neustadt)、ドレスデン(Dresden)(以上、東ドイツ)、咸興(北朝鮮)といった既存都市の復興と社会主義化に関わった専門家が含まれており、その人選はヴィンが既存都市の復興と社会主義化を同時に行う事を考えると理に適ったものであったと言える。

このような背景から当然1970年代ベトナム・ヴィンにおける都市復興には、1950年代東ドイツにおける既存都市の復興と社会主義化の知見が受け継がれたと考えられる。ただ、東アジアの咸興とヴィンの場合は、既存都市の復興と社会主義化に加えて、さらに近代化も行う必要があったという点で東ドイツの諸都市の復興とは異なっていた。その意味では、同じアジア地域における咸興復興の経験は、ヴィンの復興計画に直接的に影響し、何らかの形で受け継がれたものと考えられる。

そこで、3章においては咸興とヴィンの復興計画における共通点と相違点を挙げ、今後の研究において都市設計の観点から東ドイツによる咸興とヴィンの復興計画の連続性を指摘するための基礎資料の一端を作成する。

## 3. 咸興とヴィンの都市復興支援の共通点と相違点

### 3-1. 共通点

#### (1) 計画地域の綿密な調査

咸興の計画では、計画対象地域の調査が断続的に行われており、その成果は4報の報告書としてコンラート・ピュシエルにより中央に提出されている(富田, 2015)。咸興の都市設計においては、こういった計画地域の調査が、復興都市計画を定める上で重要だという位置づけであった。

ただ、報告書の作成年から判断すると、調査は都市設計と平行して行われていたと考えられる。

ヴィンの計画でも同様に計画地域の調査は重要視された。ただヴィンの場合は、都市設計に着手する前の1973年夏と冬の2回に渡って専門家による集中的な調査が行われた。この調査には、咸興の都市復興のドイツ人技術団の団長を務めた建築家ハンス・グローテヴォール(Hans Grotewohl)も加わっていたという(川喜田, 2019)。そして、夏の第1回調査後に調査団が「ハノイでもベルリンでもなく、ヴィンで調査、計画立案、建設管理を行うように」と勧告した事で、東ドイツのヴィンの都市復興計画は現地で立案され、建設管理もドイツ人の手によってなされることとなった(Schwenkel, 2020)。他都市を担当した他国の都市計画家が自国で設計し、施工については関与しなかった中で、東ドイツは本格的に現地にコミットしていた事が分かる。

#### (2) 都市設計の内容

このように現地の気候の特徴や、建築・都市の特徴が綿密に調査され、現地の特徴が建築や都市に組み込まれ、現地の技術で建設されることとなった。ただ、根本的な計画理念としては、咸興もヴィンも、工業地域、住宅地域、緑地などに明確にゾーニングし、幹線道路を機能的に配置した近代的な都市計画であった。咸興もヴィンも復興と社会主義化に加えて都市の近代化が必要であった。社会主義的な要素としては、それらの観戦道路に接続する形で巨大な広場(咸興では「中央広場」、ヴィンでは「勝利の広場」)が設けられ、広場に隣接してモニュメンタルな建築(様式的ではなくヴォリュームの構成で記念碑性を表現した建築)が計画された。こうして近代的な社会主義都市の骨格が形成された。

#### (3) 街区計画

住民の住まいとしては、咸興もヴィンも、団地が計画されており、その基本的な計画手法も共通していた。この街区計画の単位には、ソ連でマイクロライオン(Микрорайон)、東ドイツでヴォーンコンプレクス(Wohnkomplex)、と呼ばれる地域計画上の単位が用いられていた(英語ではマイクロディストリクト Microdistrict と翻訳される)。

団地の住棟は、基本的に中層の板状住棟が採用された。団地の敷地内には、住棟だけでなく、商店、公共施設(学校、保育所、図書館など)が用意された。

### 3-2. 相違点

上記のような共通点がある一方で、下に挙げるような相違点も見られた。

#### (1) 現地技術者との関係

咸興において、東ドイツの技術者と北朝鮮技術者の関係は師弟のような関係(師が東ドイツの技術者で、弟子が北朝鮮の技術者)とされた。

一方で、ヴィンにおいては、東ドイツの技術者とベトナム

ムの技術者は、対等の関係とされ、都市復興の過程も「共同生産」と呼ばれた。ただし、形式上は計画の最終決定権がベトナム側にあったとしても、実質的な都市設計における実施権は東ドイツ側が握っていたようであった (Schwenkel,2020)。

#### (2) 建設技術

咸興では中層の団地はパネル工法が基本とされたが、ヴィンではレンガ造とされた。咸興とヴィンではインフラや建設資材工場の整備状況が大きく異なっていた。咸興では建材工場が整備されていたが、ヴィンでは建材と技術者のいずれも不足していたため、中層であってもレンガ造が基本とされた。

#### (3) 住宅団地の配置方法

3-1 で述べたように、団地の基本的な計画手法は共通していたものの、団地の配置方法は異なっていた。咸興では住棟を直行させ中庭状の囲いを形成していたが、ヴィンでは直行させず、かつ部分的に雁行配置させたため住棟で囲まれる中庭は存在せず、代わりに団地地区内に緩やかな空間の流れが形成された。

### 4. 結

最後に各章の議論を振り返ったうえで、まとめと今後の課題の整理を行いたい。

まず2章で、東ドイツによるヴィンの復興都市計画の背景を考察した。1930年代ソ連の社会主義都市建設におけるドイツ語圏建築家の活動にまでさかのぼり、そこから1930年代ソ連、1950年代東ドイツ・北朝鮮、1970年代ベトナムというように大きく3段階に都市設計の系譜を分けて捉え直した。

1930年代ソ連における「新規の社会主義都市の建設」に都市計画の責任者としてかかわったマイヤシュミットといったドイツ語圏の建築家達を第一世代とするならば、彼らのチームの一員として働いた経験を持つリープクネヒトやピュシエルが第二世代として1950年代東ドイツ・北朝鮮における社会主義都市建設を主導したのは当然の流れであった(なお本稿では論じる事はできなかったが第二世代にバウハウス関係者が散見される点も見逃せない点である)。そして、1970年代ベトナムにおける既存都市の復興・社会主義化・近代化に関わったのは、いわば社会主義都市建設の第三世代と言え、第一・第二世代の経験で得られた知見が集約され投入されたかと捉えられる。

そういった視点で、3章では、第二世代の咸興と、第三世代のヴィンの復興における共通点と相違点を挙げ、同じアジア地域における咸興とヴィンの復興計画において、都市設計として何が受け継がれ、何が変わったのかを把握した。

共通点としては、(1) 計画地域の綿密な調査、(2) 都市設計の内容、(3) 街区計画が挙げられた。これらは、1960

年前後における咸興の都市計画の最終段階の報告書において、都市設計の方法論として明確に述べられていることから、方法論自体は咸興・ヴィンの間で受け継がれた事が想像できる。ただし、現時点ではヴィンについての報告書等のアーカイブ資料は収集できていないため、これ以上の分析は今後の課題となる。

一方で相違点としては、(1) 現地技術者との関係、(2) 建設技術、(3) 住宅団地の配置方法が挙げられた。(1) (2) は東ドイツにおける建設援助の成熟とともに、現地技術者および現地建設技術との関係の取り方も一方的なものではない双方向的なものになったと考えられる。(3) については東ドイツにおける団地配置の計画理論自体の変化が原因として考えられる。いずれも推測の域をでないため、共通点と同様に、今後はアーカイブ資料に基づく確認が必要である。

### 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP18H01616 「朝鮮半島の冷戦下都市復興における東西建設援助の建築史的研究」による成果である。記して感謝申し上げる。

### 図版出典

図1: 著者作成

### 参考文献

- 1) *Das Volk baut seine Zukunft auf, Text zum sozialistischen Aufbau in der Demokratischen Republik Vietnam*, Köln, Liga Gegen den Imperialismus, 1974.
- 2) Werner Durth, Jörn Düwel, Niels Gutschow, *Ostkreuz, Architektur und Städtebau der DDR · Band 1*, Frankfurt, Campus, 1999.
- 3) Nadine Mensel, *Der Entwicklungsprozess der Sozialistischen Republik Vietnam*, Wiesbaden, VS Verlag für Sozialwissenschaften VS, 2013.
- 4) Hideo Tomita and Masato Ishii, "The Influence of Hannes Meyer and the Bauhaus Brigade on 1930s Soviet Architecture", *Journal of Asian Architecture and Building Engineering*, Vol. 13, No. 1, Tokyo, Architectural Institute of Japan, 2014, pp. 49-56.
- 5) 富田英夫「東ドイツの建築家コンラート・ピュシエルによる朝鮮半島の調査」『九州産業大学工学部研究報告』(51)、2015、pp. 53-56.
- 6) Curtis Swope, *Building Socialism, Architecture and Urbanism in East German Literature, 1955-1973*, New York, Bloomsbury Academic, 2018.
- 7) Hideo Tomita, "Wohnkomplexe in the 1930s USSR and 1950s North Korea by an East German Architect", *Proceedings of the 11th ISATA*, Miyagi, 2016, pp.2288-2292.
- 8) 川喜田敦子「朝鮮戦争後の復興支援と国際関係 —東ドイツの北朝鮮支援を中心に—」『人文研紀要』92 巻、中央大学人文科学研究所、2019、pp. 321-342.
- 9) Thomas Flierl (ed.), *Bauhaus Schanghai Stalinallee Haneu, Der Lebensweg des Architekten Richard Paulick 1903-1979*, Berlin, Lukas Verlag, 2020.
- 10) Christina Schwenkel, *Building Socialism, The Afterlife of East German Architecture in Urban Vietnam*, New York, Duke University Press, 2020.